シンポジウム

ラテン・アメリカの近代化

＜総　括＞

佐々木　專三郎

"近代化"を一義的に概念づけることはできない。このことばをもって，"西欧化"を示すものであるという人もあるし，また"市民社会の形成"を，あるいは"伝統社会から産業社会への社会変動"を，それの内容であるとする人もある。いずれにせよ，社会構造の変動過程はただ社会の経済的あるいは政治的側面といった一つの点からするだけでは，十分に把握できるとは思われない。換言するならば，社会変動は一つの社会構造の，経済過程，政治過程，精神過程などの諸次元においての並行的あるいは継起的変動であるといってもよいであろう。今回おこなわれたシンポジウム，"ラテン・アメリカの近代化"においては，4人の報告者は，それぞれの専門とするところの経済学，法律学，政治・倫理思想論ならびに歴史学の観点から，この課題にアプローチして，いくつかの問題を提起したのである。

これらの報告に対して，出席会員諸氏から数多くの質問がなされたが，とくにそのうちで，"ラテン・アメリカ人として近代化をどのように考えているか"（皆川，賀川両氏），"制度はいちおう近代化されているのに，実質がともなわないのは，どのように説明したらよいか"（松浦氏）―― の二つが注目を引いた。前者については、ラテン・アメリカの特徴として近代法意識の問題，明日に対する価値観，日本などと違ってラテン・アメリカ諸国がそれぞれの国家や文化に対する意識が低く，ラテン・アメリカ全体への意識の方が強いことなどがあげられた。そしてラテン・アメリカの近代化を計る一つのメルクマールとしては，Alfonso Reyes（メキシコ）が指摘したように，Alfabeto（教育），Pan（食糧），Jabon（衛生）の三つが重要であるとの見解が明らかにされた。一方，後者の疑問に対しては，欧州思想の導入によって近代化の意識のみが先行したこと，西欧の近代化が工業と都市の並行的発展によってなされたのに対し，ラテン・アメリカの場合は都市ができてから工業化が進められた点などが指摘された。